

A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM

君が望む永遠 二次創作小説
夏の夜の夢

You spotted snakes, with double tongue,Thorny hedgehogs, be not seen; Newts and blind-worms do no wrong; Come not near our fairy queen: Philomel, with melody,Sing in our sweet lullaby: Lulla, lulla, lullaby; lulla, lulla, lullaby: Never harm, nor spell, nor charm,Come our lovely lady nigh; So good-night, with lullaby...

有栖山葡萄

洗面室にある窓から空を見上げると、夏だということにどんよりとした灰色の雲が垂れ込めていて、陰鬱な気分にはせられた。起き抜けの意識にかかった霧を、左右に頭を振って払い軽くノビをする。

「んっー怠いわね、まああと一日がんばりますか」

だれとはなしにつぶやき、顔を洗い軽く髪を湿らせて寝癖を整える。そして自分の部屋に戻ると、私は鏡に向かい身支度を始めた。

「あああ、今日もひどい限だわ」

限のできた下脛まぶたを指でなぞりそのまま押し下げると、目も少し充血していた。

「とりあえず誤魔化すしますか」

はあと小さくため息をつくとき、ファンデーションを取ってブラシでのせていく。

会社勤めを始めて一年以上経って、朝の支度にも慣れていた。いつもより濃いめの化粧を済ませると、髪を手早く整える。

「まあこんなもんなかな」

鏡を見てチェックすると、あとはポストンバッグに孝之の家に泊まる用意を済ませる。ある程度は彼の部屋に置いてるけど、着替えなんかはいつも持って行くようにしている。

「さて、朝ご飯食べて会社に行きますか」

言葉に出して気合いを入れると、居間に向かう。

「おはよう」

「はい、おはよう」

お母さんは私より早く出ているお父さんと一緒にご飯を食べ終えていて、お茶を飲みながら折り込み広告を眺めていた。

味噌汁とご飯をよそい、おかずの用意されたテーブルにつく。おかずは塩鮭と卵焼き、それとお弁当の残り。

「いただきます」

本当なら家族一緒に食べた方がいいのだろうけど、さすがに六時前に起きるのは辛い。

一人ご飯を食べていると、お母さんの視線を感じた。

「ん、どうしたの」

顔をあげお母さんを見ると、渋い顔をしていた。

「水月、顔色良くないけど平気なの？ ここのところずっと調子悪そうにしてるでしょ」

「うーん、ちよつと眠りが浅いのかな」

睡眠時間は足りているのに、ここの最近の眠りが浅いことは気になっていた。

「前から心配だったけどまさか妊娠、なんて事無いでしょうね」

「えっ！ ないない、それはないから」

慌てて箸を持ったまま手を振って全力で否定する。

それはたまに勢いでそのまま生ですることはあるけど、普段はちゃんとゴムをつけてるし、生理だって別に遅れてない。

「本当に大丈夫なのね？」

母親の見透かそうとする視線が痛い。

「うん、大丈夫だから」

安心させるように、できるだけ笑顔で答える。

「じゃあほかに何か心配事でもあるの？ 今日には特に顔色悪いし、目の隈も隠しきれないわよ」

「うーん、ちゃんとファンデで隠したんだけどなあ」

さつきも鏡で見たしだしきれないにしても、隈はほとんど目立たないはずだった。

「逆よ、塗りすぎて不自然なのよ」

「あちゃ、そういうことか」

ちよつと意識してやり過ぎたらしい。この辺は同じ女としては見過ごせないってことか。

「もう少し上手くやりなさい」

「はい」

素直に返事すると、朝食の続きを食べる。

しばらくは会話もなく、テレビからワイドショーの音が流れているのを聞き流しながら食事を続けた。

ご飯が終わるのを見計らって、お母さんが声をかけてくる。

「水月、今夜はどうするの」

「ん？ 今日って何かあったっけ」

なんのことを聞いているのかわかってるけど、とぼけてみる。
「今週も鳴海君のところに泊まりなのかって聞いているのよ」

予想通りの内容だった。

「うん、週末だし泊まることになるかな、たぶん」

週末に孝之の部屋に泊まるのは、すでに当たり前のようになっていた。

「そう……」

お母さんの声が曇る。

「どうしたの」

心配しているのは知っている。小言も今に始まったことじゃない。

「鳴海君といろいろあるのは私も知ってるわ。でもね、若いうちはいいけど、そろそろちゃんとした形も考えないと」

「私二十一よ、そんな話まだ早いよ」

ちゃんとした形が結婚を意味することくらい私にもわかっている。今のほとんど同棲みたいな生活を、よく思っていないことも知っている。

「そうは言ってもね、今のあなたを見ると。お見合いしろとかそういうのは言わないけど、もう少し考えて」

「あつけない、もう時間だ」

言葉を遮って慌てて立ち上がる。

「まあいいわ、今度ゆっくり話ししましょう。自分のことなんだからもう少し真面目に考えなさい」

「わかった。じゃあ、いつてきます」

食器を持って居間から台所に逃げ込み、流しに食器を浸ける。そして自分の部屋へ戻って、仕事用の鞆とポストンバックをつかむと会社へと向かった。

ここのお母さんから言われてる孝之とのこと。

特に最近はやんちゃとした形をとれ、結婚しろと言われる。

私だって孝之とずっと一緒に居たいし、いずれは結婚だつてしたいと思ってる。

でもそれは今なんだろうかと考える。

確かに今の私は幸せだ。

大好きな孝之と一緒に笑いあつて過ごせるこの時間はなによりも幸せだった。だからこれからもずっと、今のままであつてほしいと願ってる。

それは偽りでも幻でもなく、本当に大切な現実だった。

だけどその幸せに影を落とす存在がある。

不安の原因、それは遙。

孝之は遙の恋人なんだと、私を否定する。

私はいまだに、彼女の影におびえているのだろうか。

もし彼女が目覚めたら孝之との関係がどうなってしまうのか、

もうそんなことはないかと頭では理解しているのに、心の奥底で不安が拭えないでいた。

遙が目覚めたら、私達がつきあつてることを伝えようと約束していた。

孝之はきつと約束を守ってくれる。

そう信じてはいるけれど、孝之は本当に言ってくれるだろうか、それに遙に伝えたとしてそのまま私とつきあい続けてくれるだろうかと不安は拭いきれなかった。

今が幸せだからこそ、それを失うのが怖い。

いつそ結婚してしまえばそんな心配もなくなるのかもしれないが、そこまで踏み込むだけの勇氣もないし、それに孝之だって戸惑うだろう。

そんな事を考えてしまうのも、こここの疲れが原因かもしれない。

身体が弱ると、だんだん心も折れてくる。

ずっと水泳をやっていたから体力には自信があつたけど、こここの疲れはおかしかった。

睡眠時間が短い訳じゃない。

仕事帰りに孝之の家に寄ることは多いけれど、泊まらない日は出来るだけ早めに自宅に戻っている。そのあとは夜更かしもせずに寝るようにしていた。

それなのに、あまり疲れがとれていない。

眠りが浅いとかを通り過ぎて、むしろ寝るほどに精神的な疲

れが溜まっている。

原因は間違いない、ここしばらく見ているはずの夢。

その夢を見ていることに気づいたのは一か月前くらいだった。その前から見ていたのかは判らないけれど、気がついてからはほとんど毎日のように見ているようだ。

そしてそのせいで眠りも浅くなっていた。

いま「見ているはず」といったのは、夢を見た記憶が曖昧としているから。それなのにその夢が毎回同じだと言うことはなぜか記憶として残っている。

夢なんてそんな曖昧わづまなものだろうと思うかもしれないが、何度も見ているそれが同じだと記憶しているにもかかわらず、まったく内容を覚えていないのはおかしい話だと思う。

眠りが浅くなり、見ている夢は目覚めと共に輪郭のぼけた記憶となる。

そしてその訳のわからないものは、私の意識に澱おぼのようにたまっていった。

浅い眠りは私の全身に残していった。

一体私の中で、なにが起きてるのか。

フロイト先生に診断してもらおうにも、肝心の夢の内容がわからないのではどうにもならない。

内容が判ればいろいろと考えられるのだろうけど、そんな都合のいい方法は思いつかない。

やっばりいろいろと弱りすぎてみたいだ。

どうにもならないことを、ぐるぐると考えている。

せめて気持ちだけでも盛り上げないと、それこそノイローゼで朝の電車を止めてしまうかもしれない。

「よしっ、一日乗り切るぞっ」

声に出して言ってみる。

明るく振舞って気持ちを鼓舞する。

今日一日がんばれば、夜には孝之に会える。

週末でお泊まりだし、孝之にめいいっぱい甘えられる。うん、甘えさせてもらおう。

きつとそれで元気が取り戻せる。

孝之との関係に自信が取り戻せる。

今の私にとって孝之は、唯一の抛り所なんだから。